平成 30 年度　全学共通教育自己点検評価書

項　目	取組内容（成果、課題など）	根拠資料	
			取り組みを示すポンチ絵（公表用1枚）
基準５　教育内容及び方法 ５－２　教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。(学士課程)	○イングリッシュ・センターを設立し、全学部で「英語１・2・3・４」の授業を「話す」「聴く」「読む」「書く」の４つのスキルに振り分け、効率的に英語を学ぶカリキュラムに統一した。また、「英語１・２・３・４」を履修・受験した上で，成績では合格判定単位修得の可能性がある学生に対し実施する履修のための「集中クラス」の開講を始めた。【資料1】 ○新規科目「高年次教養セミナー」を前期 5 回、後期 5 回、計 10 回実施した。【資料 2】 ○「教養講演会」を以下の 2 回開催し、学生の自学自習の動機付けを行った。第 7 回　石田芳弘「政事と祭事を通して民主主義を考える」（6 月 13 日）、第 8 回荒川清秀「中国語を歩く―日中漢字の意味の違いを考える」（11 月 27 日）。【資料 3】 ○図書館の「教養図書コーナー」の蔵書が昨年より約 600 冊増え、さらに充実したが、貸出回数は減っている。5 月の貸出回数が約 100 回減った理由として、5 月に開催している図書館ツアーの回数が 9 回（参加者 508 名）から 6 回（参加者 420 名）になったことが考えられる。【資料 4】	資料 1 資料 2 資料 3 資料 4	
基準６　学習成果 ６－１ 教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。	○学生による授業評価アンケートの結果から、学生の授業満足度が 5 段階評価で、4 以上の分野は、スポーツ・健康科学、複合領域、社会科学、人文科学であるが、スポーツ・健康科学、複合領域では、前期で低く、後期で高くなり、人文科学では、前期で高く、後期で低くなる傾向がある。自然科学は、前期で４を超えたが、後期では４を切り、英語は、平成 28 年度後期をピークに 4 期連続で下降線を辿っている。【資料 5】	資料 5	

基準８　教育の内部質保証システム ８－１ 教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備さ、機能していること。 ８－２ 教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能していること。	○平成 30 年度第 1 回 FD 研究会「出会いのレッスンとしての授業　アイスブレイク入門　なぜ、学生と学生を出会わせるのか？―実践報告その 3」を開き（6 月 27 日）、教育学部の今村光章教授が学内、学内のさまざまな場所で実践されているアイスブレイクの方法を、ワークショップ形式で伝授し、その有効性を実体験した。【資料 6】 ○平成 30 年度の第 2 回 FD 研究会「学生から見た教養教育と学びの空間」を開催し、大学の授業改善を考える学生有志グループによる「教養教育の重要性」について、名古屋工業大学の学生による「東海地区のラーニング・コモンズの現状」について、私立大学と国立大学で教養教育がどのようなカリキュラムで実施されているのか、とくに東京工業大学と早稲田大学の事例を詳細に紹介した【資料 7】	資料 6 資料 7	

教養教育推進部門会議 ⇒ 教学委員会

	基準 5　教育内容および方法	基準 6　学　習　成　果	基準 8　教育の内部質保証システム
平成29年度	○「異分野からの学び」を重視。履修方法を周知するための資料を作成。 ○すべての学部の全学共通教育の「英語」を 4 技能に分け、English Center 設立を準備。 ○平成 30 年度全学共通教育授業開講科目一覧を分野ごとに整理し、受講定員など全体像を一覧にしたものを元に、執行部と部会長で定員や開講科目のバランスについて検討していくことにした。 ○高年次学部混成形式のセミナーを８回、試行的に実施した。これを平成30年度から正規の授業とすることに決定。活性化経費（教育）で「高年次教養セミナー開講に向けて」を刊行。 ○「教養講演会」を以下の 3 回開催。第 4 回トマス・グラムリヒ「異文化理解と異文化対応能力」、第 5 回野村誠「僕の教養は全て音楽を通して身に付けた！」、第 6 回森脇久隆「森脇学長、映画を語る！」。活性化経費（教育）により「岐阜大学教養講演会 2016」を刊行。 ○図書館の「教養図書コーナー」を充実。学生の図書貸し出し数が伸びた。	○平成 29 年度からこれまでの「学生による授業評価」の質問項目を変更し、簡略化した。その授業評価結果より、「人文・社会・スポーツ・複合・英語・第二外国語」の分野で、5 段階評価で 4 以上を保持しているが、「スポーツ・複合・第二外国語」をのぞき、全体的に、前期から後期にかけて満足度が下降傾向にある。とくに「自然」は、3 年ぶりに 5 段階評価で 4 を切った。	○リフレクションペーパーを活用して、授業をわかりやすくするための工夫を共有するとともに、学生による授業評価の高い授業７つについて参観を実施（前期、6 月 12 日～ 7 月 12 日）。 ○平成 29 年度第 1 回 FD 研究会「授業がうまく行かない時どうすればいいかを考える―わたしはこうして改善しました―実践報告その 1 」」を開き（6 月 28 日），教育学部の中村琢准教授、工学部の永井学志准教授が全学共通教育で担当している「科学的なものの考え方」と「日曜大工からはじめる力学」の授業実践について報告し，活発な意見交換を行った。 ○平成 29 年度第 2 回 FD 研究会「「全共英語，なぜ私はすべての学生にＳをつけるのか？―実践報告その 2 」を開催し（10 月 11 日）、地域科学部の牧秀樹准教授が「全共英語の授業実践と成績評価について」と「岐阜大学英語教育の将来ヴィジョン私案」について語り、英語教育に関する議論を深めた。
平成30年度	○イングリッシュ・センターを設立し、全学部で「英語 1・2・3・4」の授業を「話す」「聴く」「読む」「書く」の 4 つのスキルに振り分け、効率的に英語を学ぶカリキュラムに統一した。また、「英語 1・2・3・4」を履修・受験した上で、成績では合格判定にいたらなかった学生に対して、再履修のための「集中クラス」を開講した。【資料 1】 ○新規科目「高年次教養セミナー」を前期・後期に開講した。【資料 2】 ○「教養講演会」を以下の 2 回開催し、学生の自学自習の動機付けを行った。第 7 回　石田芳弘「政事と祭事を通して民主主義を考える」（6 月 13 日）、第 8 回荒川清秀「中国語を歩く―日中漢字の意味の違いを考える」（11 月 27 日）【資料 3】 ○図書館の「教養図書コーナー」の蔵書が昨年より約 600 冊増え、さらに充実したが、貸出回数は減っている。5 月の貸出回数が約 100 回減った理由として、5 月に開催している図書館ツアーの回数が 9 回（参加者 508 名）から 6 回（参加者 420 名）になったことが考えられる。【資料 4】	○学生による授業評価アンケートの結果から、学生の授業満足度が 5 段階評価で、4 以上の分野は、スポーツ・健康科学、複合領域、社会科学、人文科学である。 　スポーツ・健康科学、複合領域では、前期で低く、後期で高くなり、人文科学では、前期で高く、後期で低くなる傾向がある。 　自然科学は、前期で 4 を超えたが、後期では 4 を切り、 　英語は、平成 28 年度後期をピークに 4 期連続で下降線を辿っている。【資料 5】	○平成 30 年度第 1 回 FD 研究会「出会いのレッスンとしての授業アイスブレイク入門　なぜ、学生と学生を出会わせるのか？―実践報告その 3」を開き（6 月 27 日），教育学部の今村光章教授が学内、学外のさまざまな場所で実践されているアイスブレイクの方法を、ワークショップ形式で伝授し、その有効性を実体験した。【資料 6】 ○平成 30 年度第 2 回 FD 研究会「学生から見た教養教育と学びの空間」を開催し、大学の授業改善を考える学生有志グループによる「教養教育の重要性」について、名古屋工業大学の学生による「東海地区のラーニング・コモンズの現状」について、それぞれ発表。「多様化する教養教育」について、私立大学と国立大学で教養教育がどのようなカリキュラムで実施されているのか、とくに東京工業大学と早稲田大学の事例を詳細に紹介した。【資料 7】